

源氏物語

第二卷

玉上琢彌 訳註

角川文庫



源氏物語

第二卷 全十冊

たまがみたくや
玉上塚彌＝訳注



角川文庫 2208

昭和四十年二月二十五日 初版発行
昭和六十三年一月三十日 二十版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二一十三—三

編集部(〇三)二三八—八四五—
電話

営業部(〇三)二三八—八五二—

〒一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——旭印刷 製本所——文宝堂製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

源氏物語

付 現代語訳 第二巻

玉土琢彌一訳注



角川文庫 2208

凡例

一 底本は、定家自筆本の存する巻はこれを用い、存しない巻で明融摸本の存する巻はこれを用い、その他は、池田龜鑑博士の「源氏物語大成」の底本である飛鳥井雅康等筆本（大島本）を用いる。貴重な典籍の使用を許された所蔵者各位に深謝する。

二 これら底本を改めた場合は、本文の右傍に*印を付し、本文の末に表示する。注意すべき異同は、本文の右傍に*印を付し、脚注欄に異文を掲げ、必要あれば括弧して訳を付した。

三 本文は仮名遣いを正し、適宜に漢字をあて、句読点を付し、会話には「」を付して話者の名を括弧内に小字で記した。作中人物の心を述べた文にも「」を付したことがある。すべてわかりやすくすることを主旨とし、必ずしも統一を計らず、繁雑になることを避けた。また、段落を設け、その要目を脚注欄に掲げた。

四 脚注欄は、段落ごとに要目を掲げ、注意すべき異文を*印を付して掲げたほか、引き歌・故事出典・有職故実などを記し、さらに語義に及んだ。訳文でわかりにくいきらいのあるばあい、脚注で補うように努めたのである。

五 訳文は、独立して読めるように注意したが、原文から離れすぎないように注意した。読者が原文を味わわれんことを望むからである。

六 既刊の分に収録された巻を参照してほしい場合、この文庫本の頁数をかかげた。

七 文庫本は簡略を旨とするから、原文の美しさ、おもしろさの説明や、時代と背景の説明その他、省略しなければならなかった事が多い。全巻にわたり鑑賞を書き試みた「源氏物語評釈」(全十二巻別巻二、角川書店刊行)をあわせ見られれば幸いである。

目次

凡例

系図

本文

末摘花

一	夕顔の思い出(思へどもなほ飽かざりし)	元	一九	現代語訳	三
二	乳母子のするうわさ話(左衛門の乳母とて)	二〇	一九		
三	常陸の宮の姫の琴(宣ひしもしるく、十六夜の月をかき程に)	二二	二〇		
四	頭の中將に見つけられる(寢殿の方に、人の気配聞くやうもや、と)	二三	二〇		
五	同車して大臣邸に行く(おのゝ契れる方にもあまえて)	二四	二〇		
六	二人の競争(その後、こなたかなたより、文などやり給ふべし)	二五	二〇		
七	命婦に手引きを求める(秋の頃ほひ、静かに思し統けて)	二七	二〇		
八	姫に会う(八月廿余日、宵過ぐるまで待たるゝ月の心もとなきに)	元	二〇		
九	帰邸。頭の中將とともに参内	三	二一		
一〇	(二條の院におはして、うち臥し給ひても)	三	二一		
一一	夕方、姫に文をおくる	三	二一		

校本文

現代語訳

三

三

二 源氏、自邸に退出し、命婦に文を送る（わが御方に臥し給ひて）
 三 源氏、若草の室に至る（つく／＼と臥したるにも）
 三 大臣家も帝も、噂を聞く

（かうやうに、とゞめられ給ふ折々なども多かるを）

四 源氏と源典侍と、歌の唱和（帝の御年ねびさせ給ひぬれど）

五 源氏と源典侍、頭の中將におどされる（この君も）

六 源氏と頭の中將と応酬（君はいと口惜しく）

七 頭の中將、源氏と競う（さてその後は、ともすれば）

八 七月、藤壺立后（七月にぞ后居給ふめりし）

元 若宮成長して、いよいよ源氏に似る

（御子は、おようけ給ふ月日に従ひて）

花 宴

一 南殿の桜の宴（二月の二十日あまり、南殿の桜の宴せさせ給ふ）

二 弘徽殿の細殿の女（上達部おの／＼あかれ）

三 女を探索する（その日は後宴の事ありて、紛れ暮らし給ひつ）

四 二条の院と左大臣邸と（大殿にも久しうなりにける）

五 右大臣邸の藤の花の宴（かの有明の君は）

六 寝殿の女官たち（寝殿に女一宮、女三宮のおはします）

葵

一 御代変わり後の人々（世の中変はりて後）

二 六条の御息所、伊勢下向。院、源氏をしかる

三 三
三九

三 三
二四

三 三
二四

三 三
二四

三 三
二四

三 三
二四

三 三
二四

三 三
二四

三 三
二四

三 三
二四

三 三
二四

三 三
二四

三 三
二四

三 三
二四

三 三
二四

三 三
二四

三 三
二四

(まことや、かの六条の御息所の)

源氏と御息所と、兩人の思い（又かく院にも聞しめし）

朝顔の姫君の自戒（かかる事を聞き給ふにも）

大臣の姫、懷妊（大駁には、かくのみ定めなき御心を）

六 齋院の御萩（その頃、齋院も下り居給ひて）

大臣の姫、見物に出る（大殿には、かやうの御ありきも）

大臣家と御息所と、車争い（日だけ行きて）

御息所の嘆き（つひに御車ともたて続けつれは）

源氏和讃（何と何とにつけて 装束 人の有様）

二、湯田 車争し掛半（参の日は大屋には物見給はす）

三 源氏 老君と見物(2)日は 二多の院に歸をおけして

三 和懸行との関係（和懸行は、物にさかす）

三 大臣の要、病風（大段）は、即物怪の終て、二、三

源氏、御息所之方問（かゝる御息所のしれど）

七 御息所の異常心理（大段こま、御勿怪いたる記）

六 物の怪の出現（まださるべき望でもあらずと）

元男子誕生（少し御声もしづまり給へれば）

云方々の思い（かの御息所は、かかる御有様

三一同参内（若宮の御まみの美しさなどの）

三大臣の姫、死す（殿のうち人ずくなにし）

三 葬儀、人々の嘆き（こなたかなたの御送りの人ども）

源氏の日々（大將の君は、二条の院にだに）

二六五
二六四
二六三
二六二
二六一
二六〇
二五九
二五八
二五七
二五六
二五五
二五四
二五三
二五二
二五一
二五〇
二四九
二四八
二四七
二四六
二四五
二四四
二四三
二四二
二四一
二四〇
二三九
二三八
二三七
二三六
二三五
二三四
二三三
二三二
二三一
二三〇
二三

五 兩人の思い（心にまかせて見奉りつべく）

六 源氏、野の宮を去る（殿上の若君達などうちつれて）

七 御息所母子の思い（御ふみ、常よりもこまやかなるは）

八 源氏、斎宮と贈答（十六日、桂川にて御はらへし給ふ）

九 御息所、斎宮と参内（心にくく、由ある御けはひなれば）

一〇 斎宮母子、伊勢下向（出で給ふを、待ち奉るとて）

一一 二院のご病氣、帝の行幸（院の御なやみ、かなな月になりては）

一二 東宮行啓（東宮も、ひとたびにと、おほしめしけれど）

一三 桐壺院崩御（おは后も、参り給はむとするを）

一四 院崩御後の藤壺、源氏（中宮大將殿などは）

一五 藤壺、三条の宮に退出（宮は、三条の宮に渡り給ふ）

一六 源氏邸の寂しき（年かへりぬれど、世の中今めかしき事なく）

一七 臘月夜、尚侍になる（御匣笥殿は、二月に尚侍になり給ひぬ）

一八 逆境の源氏と左大臣（院のおはしましつる世こそ）

一九 西の対の姫君の幸福（西の対の姫君の御さいはひを）

二〇 朝顔の姫宮、斎院となる（斎院は、御ぶくにて）

二一 新帝の政治（みかどは、院の御遺言たがへず）

二二 尚侍と密会（わづらはしさのみまされど、かむの君は）

二三 藤壺、逃げおす（君は塗籠の戸の、細めにあきたるを）

二四 兩人の思い（いづこをおもてにてかは、またも見え奉らん）

二五 藤壺、東宮を訪う（大將の君は、さらぬ事だに）

二六 源氏、雲林院に参籠

一三七

三〇九

一三七

三〇

一三六

三二一

一三六

三二二

一四〇

三二三

一四二

三二三

一四二

三三三

一四三

三三五

一四四

三三六

一四四

三三六

一四四

三三七

一四四

三三八

一四四

三三九

一四七

三三九

一四八

三三〇

一四八

三三〇

一四八

三三一

一四九

三三一

一五〇

三三二

一五〇

三三三

一五〇

三三三

一五〇

三三三

一五〇

三三三

(大将の君は、宮をいと恋しう思ひ聞え給へど)

六 斎院と贈答(吹きかふ風も近き程にて)

元 源氏、帰京(六十巻といふ文よみ給ひ)

五 女君の成長

(女君は、日ごろのほどに、ねびまさり給へる心地して)

三 藤壺に紅葉を贈る(山づとに持たせ給へりし紅葉)

三 参内して兄弟と語る(まづ、うちの御方に参り給へれば)

三 頭の弁の諷刺(二十日の月、やうくさし出でて)

四 藤壺を訪う(おまへにさぶらひて)

五 尚侍より消息(大将、頭の弁の誦しつる事を思ふに)

五 故院の一周忌(中宮は、院の御はての事にうち続き)

毛 藤壺の御八講(十二月十余日ばかり、中宮の御八講なり)

元 藤壺、入道する(はての日、わが御事を結願にて)

元 源氏、入道の宮と語る(やうやう人静まりて)

四 年末の源氏(殿にても、わが御かたに独りうちふし給ひて)

四 入道の宮の邸を訪う(年もかはりぬれば)

四 除目に人々失望(司召の頃、この宮の人は)

四 左大臣致仕

(左のおとども、おほやけわたくし引きかへたる世の有様に)

四 三位の中將の友情(御子どもは、いづれともなく)

四 顔ふたぎ、負けわざ(夏の雨のどかに降りて)

四 尚侍と密会(その頃、尚侍の君まで給へり)

四 父大臣に発見される(神なりやみ、雨少しをやみぬるほどに)

一五

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

三六

三〇

三二

三三

三三

三三

三三

三三

三三

三三

三三

三三

三三

三三

三三

三三

三三

三三

三三

三三

三三

三三

三三

四 大臣、大后に語る（おとどは、思ひのままだに）

一八〇

三九

花散里

一八三

三三

一 故院の女御を訪う（人知れぬ御心づからの物思はしさは）

一八三

三五二

二 中川の女と贈答（何ばかりの御装ひなく）

一八三

三五二

三 麗景殿の女御と贈答（かの本意の所は）

一八五

三五四

四 妹君と語る（西面には、わざとなく忍びやかにうちふるまひ給ひて）

一八六

三五五

校 異

一八

補 注

一五

年 立

三七

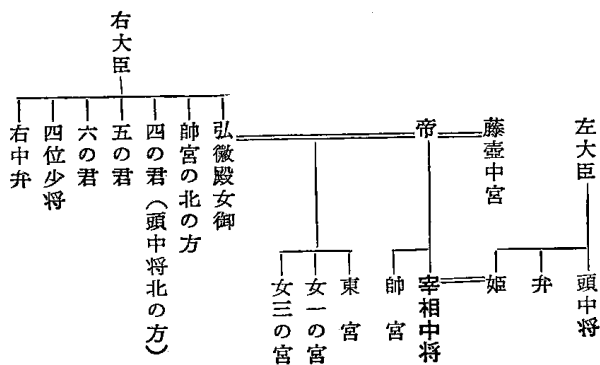
内裏図

三六

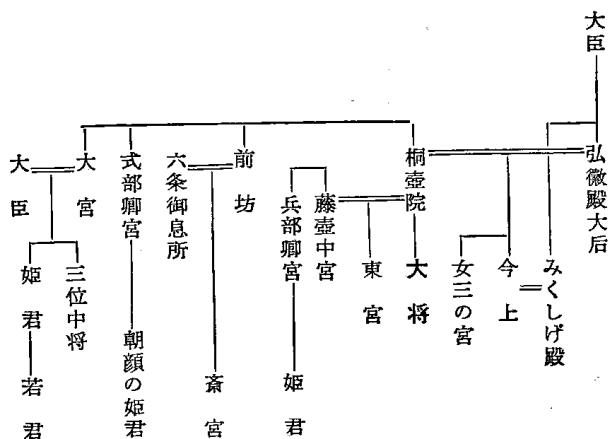
索引

三七

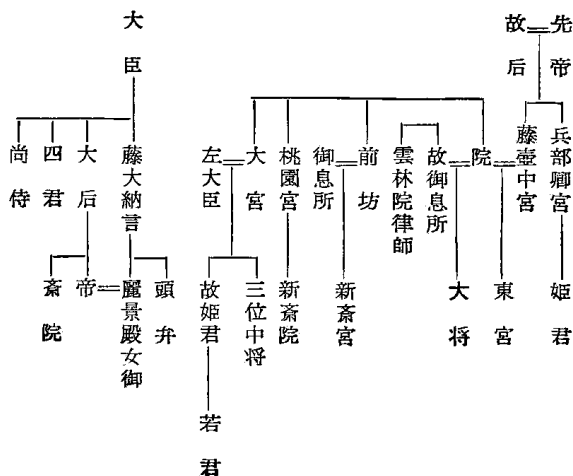
はなのえん



あふひ



さかき



はなちるさと

